

「自分の思いを相手に伝え、動かす訓練の場に」

株式会社アゴス・ジャパン
代表取締役

横山 匡氏



どこでも、誰とでも、
そこそこ自分らしく

私は、「グローバル人材」とは、「どこでも、誰とでも、そこそこ自分らしく振舞える人材」だと思う。「どこでも」というのは、日本とかどこかの国という“物理的な場所”を指していると同時に、一対一か大勢の前か、といった“場面”のことも含みます。また、「誰とでも」というのは、世代や年齢、業種、産業、ハンディーキャップ、同性愛者、宗教などを問わないということです。

また、「そこそこ」というのも大切です。グローバル人材とは、“ずば抜けてすごい人”だ、という風潮がありますが、私はそうは思いません。まずは「そこそこ」でいいのです。

なぜなら、自分らしく振舞えるということは、すなわち自分のこだわりがあるということであり、そのためには自分らしさをちゃんと分かっていることだからです。要するに、「グローバル人材」を語る前に、どのような「人材」であるかということです。そのために重要なのは、個人として周囲の人にどんな人材として自分を理解

してもらおうという自己イメージと、世界のどこかで起きたニュースを隣近所の身近なニュースと同じようにとらえられる知的な好奇心、自分との違いを受け入れ、我慢し、楽しめる耐久力、そして、常に当事者意識を持って動くリーダーシップと、今までのやり方を疑い自分なりの工夫を加えていくイノベーションマインドです。

世界を舞台に内向きになれ

私はしばしば、「若者の内向き志向についてどう考えるか」という質問を受けます。しかし、そもそも今の大人世代は本当に外向きだったと言えるでしょうか？ 内向きというのは、それだけ中が居心地がいいということであり、実は幸せなことなのかもしれません。もし、自分が身近に感じるものを“内側”と捉えるのだとすれば、昔から今に至る間に身近として捉えるものの範囲が変わってきているというか、“内側”が広がっていると言えないでしょうか。自分に関係があるものをどんどん増やして広げていくにつれ、結局、すべて身近な“内側”になっていきます。「世界を舞台におおいに内向きになれ」というのが僕の主張であり、大学には

そういう発想に立って教育してほしいと思います。

一方で気になるのは、こうやって“内側”を広げていった時、日本人は真ん中に深い穴があいたドーナツ型の人が多いということです。その理由は、自分という商品にどのような魅力があるのか、自分自信を分析・理解していないからにほかなりません。しかし、教育(education)の語源であるラテン語のeducereという言葉には、もともと、「内面から導き出す」という意味があるということを考えると、学生自身も大学に通っているだけで満足するのではなく、大学で得られるものと得られないものを冷静に判断した上で、足りないものについては自分が主導権を握って時間をデザインし、ドーナツの“穴”を埋める作業をしていく必要があります。

人は、自分を深く理解するようになって初めて、他人に対して優しくするやり方を覚えるものです。自分の思いを言葉にし、相手の心に響かせた上で相手を動かす。大学がこうした学びと訓練の場を提供できるようになるといいと思います。

不十分」との声は多い。文部科学省高等教育企画課国際企画室長の有賀理氏は「教員、スタッフ、学生のマインドをさらに変えていく必要がある」と話す。

一部では、企業側の求める人材と、大学や政府の進める取り組みの間に“ミスマッチ”があることも指摘されている。

問われるのは意欲や姿勢

では、企業や産業界が求める理想の

グローバル人材像とはどのようなものなのか。

まず、政府が掲げる“定義”では、グローバル人材について「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティーを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代まで

も視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」とされている(グローバル人材育成推進会議)。文科省は、その要素として、①語学力・コミュニケーション能力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー——の3つを挙げる。

いずれも確かにその通りなのかもしれないが、やや堅苦しい印象だ。グロ